



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イーゴル・クルーピニック、アロン・L・クロウエル編 『極北のクラッシュ : 変化する北方域における人類と動物』
Author(s)	高瀬, 克範; Takase, Katsunori
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要, 1, 63-69
Issue Date	2021-12-06
DOI	https://doi.org/10.14943/105604
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87918
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_1_takase_P63_P69.pdf



書評

イーゴル・クループニック、アロン・L・クローウェル編

『極北のクラッシュ—変化する北方域における人類と動物—』

高瀬 克範

はじめに

高緯度地域の考古学や生態学的なアプローチをとる人類誌研究にとって、ここ数年でもっとも注目される論文集のひとつが刊行された。極北では、生物が短期間のうちに激減するクラッシュとよばれる現象が頻繁に生じることが知られている。本書は、このクラッシュが人類社会にあたえた影響を、考古学をふくむ多方面の方法・視点から考察した 25 章、555 ページにおよぶ大部のハードカバーである。極北考古学の一里塚であるだけでなく、今後の日本・北海道考古学にとっても参考になる視点や方法が多数含まれていることからその概要を紹介し、現時点で考えうる意義についてコメントを残しておきたい。

I. 本書の概要

本書は、総論と終章をのぞき 4 部から構成されている。以下、書籍の構成にしたがって各章のタイトルと内容を要約する。紙幅の関係により、これをもって目次の紹介も兼ねることとする。

総論

第 1 章「『極北のクラッシュ』を研究する—急速な変化の時代における人類・動物の関係」 [I. クループニック (I. Krupnik)] では、本書が 2014~2016 年に実施されたスミソニアン共同研究プロジェクト”Arctic people and animal crashes: human, climate and habitat agency in the Anthropocene”の成果である点をふまえて、研究の目的、経過、視点などが要約されている。先行研究としてデンマークの生物学者クリスチャン・ヴィーベの先駆的業績や、先住民の視点が強く意識されている点が特徴である。

第 I 部 クラッシュの考古学的モデル

第 2 章「極北における生と死の物語」 [M. メルドガアド (M. Meldgaard)] では、歴史記録と考古学的記録を利用してオオウミガラス、ステラーカイギュウ、マンモス、ジャコウウシ、カリブー、アザラシ類、サケ科、マダラの実例をもとに、北極におけるクラッシュとその要因が概述されている。本書を理解するうえの土台となる章である。第 3 章「北太平洋沿岸における考古人口学—クラッシュ、気候、社会変動のモデル化—」 [B. フィッツユー、W. A. ブラウン、N. ミサルティ (B. Fitzhugh, W. A. Brown and N. Misarti)] では、放射性炭素年代の累積確率分布をもちいてアラスカや千島の完新世の人口を復元し、その増減のトレンドが北太平洋の東西で連動する時期と逆の結果を示す時期のあることが指摘す

る。こうした現象の背景を説明するために将来的に検証すべきモデルとして、北太平洋における海洋生産性の長期変動に着目した Long-term Interval Oscillations in the North Pacific (LIONPAC)モデルと、東北アジアにおける交易の世界システムへの参画・移住、という2つの仮説が提示された。

第4章「周期的なクラッシュか、継続的な個体数維持か—ヌナヴト準州ヴィクトリア島におけるカリブー個体数変動推定に考古学的なデータを利用する—」[T. M. フリーセン (T. M. Friesen)] では、カリブーが海氷をわたって本土と島のあいだを季節移動するヴィクトリア島周辺の遺跡から出土した動物遺体の検討から、過去のクラッシュの有無を検討する。カナダ極北ではカリブーの個体群は激しく変動するのが常態ではあるものの、この地域では15～18世紀に位置づけられるいずれの資料体でもカリブーが出土哺乳類のほとんどを占めている。つまり、個体数は維持されており、クラッシュの証拠は認められないという。第5章「タテゴトアザラシ・ハイウェイにのる—東部亜極北における気候、海氷振動、移住のモデル化—」[W. W. フィッツュー (W. W. Fitzhugh)] は、生活史が海氷と密接に関係しているタテゴトアザラシが近年の温暖化によって急激に減少していることを指摘するとともに、北西大西洋の考古資料をみてもタテゴトアザラシの減少が見られる時期があることを明らかにする。その個体数は気候や海洋環境の周期的な変化によって変動しており、グロスウォーター、ドーセット、チューレ文化などの拡大や消滅はこれによって説明できる可能性が提起されている。

第6章「クラッシュ、崩壊、危機—北大西洋からの考古学的展望—」[G. ハンブレヒト (G. Hambrecht)] は、アイスランドやグリーンランドの事例を検討し、変化に対する共同体の脆弱性を引き起こす可能性がある要因として、環境的因子(気温の変動、海氷分布の変化、資源クラッシュなど)と社会的因子(戦争、交易、経済、社会ネットワークの変化、政治的支配、社会的孤立など)があり、とくにこれらが複合的に作用したときに大幅な人口減少が生じることを論じる。

第II部 文化的相互作用—先住民、歴史、管理からの展望—

第7章「Uqlautekevkenaku /彼らはそれを無駄にしなかった—西南アラスカにおける人類と動物の関係に関するユピックの展望—」[A. フィナプ・リオードン (A. Fienup-Riordan)] は、先住民の視点からユピックの人々と動物の関係を探る。その際に重要な役割を果たすのが、食料や魚の取り扱いにかかわる多くの教訓が含まれている qanruyutet とよばれる伝統知である。これにより、単なる資源という動物認識ではなく、人類と動物の相互交流という観点から道徳的な問題として動物の増減に取り組む人文学が可能であるとの理解が示されている。第8章「危機に瀕するトリンギットの狩猟—アラスカ・ヤクタト湾におけるゼニガタアザラシの氷盤猟—」[J. ラモス (J. Ramos (Daxoots))] では、トリンギットである著者がアザラシ猟にかかわる技術、儀礼、伝統知などを詳細に解説している。一方で、それらは急速に失われつつあり、現在スミソニアンと共同で行っている研究によって記録され、将来の教育に役立てられるであろうと予測している。評者が個人的に印象深かったのは、2001年、著者がトリンギットの伝統的な資源利用についてデ・ラグーナ (Frederica de Laguna) に質問したとき、動物も山も氷河も先住民にとっては知性と道徳をそなえた尊敬すべき存在なのであって、決して「管理」される「資源」ではないのだから、「資源管理」などという用語を使うのはやめてしまえというアドヴァイスをもらったというエピソードである。

第9章「変化の時代にアラスカ・ギャンベルで海獣を観察する」[M. クーヌーカ (M. Koonooka (Paapi))] でも、セントローレンス島ユピックのハンターである著者自身の観察にもとづいて動物の行動変化やク

ラッシュが論じられている。近年の海氷減少によってセイウチの来遊時期や上陸地点には変化が生じている。一方、ホッキョククジラは海氷が少なくなったり、薄くなったりしたことによって島の周辺にとどまる個体が増えているが、かつてのように島の近くまでは寄ってこなくなったという。島から遠く離れた海上で狩猟しても小さなボートでは獲物を持ち帰ることができず、海氷がなくなったことにより海上の風はより強くなってきているため、クジラ猟はより困難になってきている。第 10 章「ホッキョククジラの個体数変動がイヌピアットとクジラの関係に与える影響とアラスカ北部の仮面ダンス」[A. フィリップス-チャン (A. Phillips-Chan)] は、アラスカ北部のポイントホープとポイントバローにおける仮面の考察である。19 世紀、仮面はクジラの捕獲を祝うだけでなく、狩猟者の名声をひろめたり、人類とクジラの精神的交流を維持したりするためにきわめて重要な役割を果たしていた。しかし、1882 (明治 15) ~1883 (明治 16) 年の食料不足とインフルエンザの流行によって人口が商業捕鯨以前の半分にまで激減し、1890 (明治 23) ~1892 (明治 25) 年にもクラッシュがあったことにより仮面の社会的な意義が急速に失われていったことが明らかにされている。1881 (明治 14) 年の段階では、ネルソン (E. Nelson) がポイントバローで仮面をひとつ購入するだけでもかなり苦勞していたにもかかわらず、1890 年代までにポイントホープだけで 170 個もの仮面が収集された背景にはクラッシュや疫病の流行が関係していたことを見事に明らかにしている。

第 11 章「アラスカ西部における 19 世紀後半のカリブーのクラッシュに関する新しい展望」(K.L. プラット、M. ガンレイ、D.C. スローター (K. L. Pratt, M. Ganley and D. C. Slaughter)] は、19 世紀後半のアラスカ西部におけるカリブーのクラッシュの原因に関する検討である。このクラッシュは銃を利用するようになった先住民による乱獲が原因と理解されることが多いが、当時の記録の不完全性やその他の情報の不足からこの説明には疑問が呈されている。そのかわり、100 年オーダーのカリブー個体数の自然の増減サイクルを想定する余地がまだあるという理解が提示されている。第 12 章「ホッキョクグマ『クラッシュ』の政治学」[B. パーリー、イヌヴィアルイト狩猟対象評議会 (B. Parlee and the Inuvialuit Game Council)] は、地球温暖化によるホッキョクグマの「受難」がさまざまなメディアで紹介される一方で、ホッキョクグマの減少は科学的な観測によっても、イヌイトやイヌヴィアルイトのハンターたちの知見によっても確認されていないことに着目する。ホッキョクグマをめぐる、ハリウッドの映画俳優や旅行産業などをまきこんで展開されている保護運動に代表されるように、十分な根拠にもとづかない理解が広く浸透してしまっているという。くわえて、先住民とともにホッキョクグマの研究にあたっているはずの科学者も科学的なデータに合致するときのみ先住民の知識を利用する、政府も先住民の声にはあまり耳を傾けない、などの問題が浮き彫りになってきている。今後は、その土地を熟知し、有益な情報を蓄積しているにもかかわらず、自ら声をあげることの少ない先住民の理解を積極的に取り込んでいくことの重要性が指摘されている。なお、この章は地球規模で進行する環境変化そのものを否定しているわけではない。

第 13 章「イヌイトの知とイッカクの個体数変動、行動、生態の科学」[M. T. ヌウィーア、K. (C.) N. シニア、C. イヌアラク、P. ニールセン、J. アルルー (M. T. Nweeia, K. (C.) N. Sr., C. Inuarak, P. Nielsen and J. Alooloo)] では、近年よく知られるようになってきているイッカクをめぐる先住民と科学者の協働が論じられている。個体数変動、回遊ルートなどの研究にとって、科学的手法とともに先住民の知識が不可欠になっていることを指摘するとともに、将来の研究の方向性についても先住民と議論して決めることや、成果を先住民に還元することの重要性も説かれている。第 14 章「動物のクラッシュを回避す

る「北極の衣服デザインの機能とシンボリズム」 [B. D. エンゲルスタド (B. D. Engelstad)] は、毛皮製衣類のデザインがもつ一ミミックな意味の分析を通して、アラスカの先住民女性による衣類製作が動物の自己犠牲に対する強い尊敬や、動物と人間との親密なつながりを再構築する役割を担っており、こうした動物観や世界観がひいてはクラッシュを回避することにつながっていることを論じる。

第 III 部 生物学的解釈

第 15 章 「『北極のクラッシュ』—ナチュラリストの概要展望—」 [G. C. レイ (G. C. Ray)] では、クラッシュを引き起こす要因として考えられる狩猟、天敵による捕食、生息地や食料の減少、病気、環境汚染などについて、極北の大型動物に焦点をあてて検討している。しかし、生息域が広く、寿命が長い大型動物のクラッシュの本当の原因を突き詰めることは非常に難しいのが現実であるという。第 16 章 「アラスカにおけるウナンガンによるキタオットセイの生業利用—2000 年間におけるパターンの変化—」 [M. A. エトナイアー (M. A. Etnier)] は、オットセイの繁殖地やそこに近いベーリング海、アリューシャン列島の遺跡から出土した動物骨の検討から、生後 3~6 ヶ月以内の幼獣の比率がきわめて高いことを指摘する。幼獣中心の狩猟はクラッシュを招くと考えられがちであるが、生後 1 年以内の死亡率が 50%以上とともとも高いため、その選択的な捕獲戦略はじつは持続性が高いと理解されている。北海道でも噴火湾沿岸のように幼獣の比率が高い地域があるため (Takase 2020)、参考になる指摘であろう。

第 17 章 「カリブー群の過去の面影—アラスカにおけるカリブーの歴史上のクラッシュを遺伝学によって評価する—」 [K. H. メイジャー (K. H. Mager)] では、19 世紀以降にアラスカで生じたカリブーのクラッシュについて提出されてきた解釈を、マイクロサテライト DNA 解析から検証している。クラッシュの理由は DNA 分析でも明らかにすることはできないが、過去のボトルネックの有無と、隣接する群との関係もふくめクラッシュ後の個体数回復がどのように進行したのかを明らかにするための有力な手段になることが指摘されている。第 18 章 「古代 DNA—歴史上存在した個体群クラッシュを理解するためのツール (北大西洋に着目して)—」 [B. A. フレイジャー (B. A. Frasier)] では、タイセイヨウセイウチ、タイセイヨウセミクジラ、ホッキョククジラの古代 DNA の分析結果が紹介されている。DNA 分析からは商業狩猟以前から個体数の減少がはじまっていたことを示唆する結果がえられているケースもあり、商業狩猟によって個体数が激減するという理解が必ずしもすべての事例で通用するわけではないことがわかる。

第 IV 部 商業狩猟時代の物語

第 19 章 「1960 年代から 1970 年代のアラスカにおけるゼニガタアザラシのクラッシュ—歴史的、生態学的展望—」 [A. L. クローウェル (A. L. Crowell)] は、乱獲や温暖レジームにおける餌・栄養不足などいくつかの考え方があつた 1960~1970 年代のゼニガタアザラシのクラッシュについて、その要因を過去の統計資料から探っている。個体数を維持しつつ捕獲可能なゼニガタアザラシの上限を全体の 3%とするアメリカ海洋漁業局 (National Marine Fisheries Service) の基準を用いると、全個体数を 100 万頭とした場合でも、200 万頭とした場合でも、歴史的な統計資料から把握される捕獲数はそれを上回っているため、過剰な捕獲がクラッシュを招いたという見解が提示されている。第 20 章 「アラスカ・プリビロフ諸島におけるキタオットセイ個体群の変化とその商業・生業利用への影響」 [D. W. ヴェルトレ

(D. W. Veltre)] では、北太平洋西側におけるキタオットセイの中心的な繁殖地であるプリピロフ諸島における 18 世紀後半以降の商業狩猟がその個体数に与えた影響が詳述されるとともに、それへのウナングンの対応などが明らかにされている。第 21 章「セイウチ、人類、海氷—亜集団スケールにおける関係、1825–2015—」 [I. クループニック (I. Krupnik)] では文献史料を駆使して過去 200 年間のチュクチ海・ベーリング海においてセイウチの多寡、海氷の状況、狩猟の展開がどのように関係していたのかが、亜集団ごとに詳細に明らかにされている。

第 22 章「セントローレンス湾のセイウチ—人類の捕獲の歴史—」 [M. マキャフリー (M. McCaffrey)] は大西洋のセントローレンス湾におけるセイウチを検討し、商業狩猟以前の生業狩猟では危険な状態に追い込まれることはなかったが、商業狩猟はやはり個体数の激減にかなり大きく作用したことを確認している。しかし、理由はそれだけでなく環境要因なども考慮する余地があるという。第 23 章「グリーンランドにおけるタイセイヨウダラ (*Gadus morhua*) —価値の変化とクラッシュ—」 [H. T. スナイダー (H. T. Snyder)] は、グリーンランドのタイセイヨウダラの例をあつかう。20 世紀後半にクラッシュが漸続的に生じたが、漁獲対象の多角化の戦略が功を奏して北大西洋の他地域のように経済が深刻なダメージをうけることはなかったことを論じる。その一方で、市場経済の浸透が進行したことにより先住民社会におけるタラの価値、社会的意義、技術などが大きく変化したことも指摘する。

第 24 章「北極のクラッシュと初期商業狩猟—スピッツベルゲン島 (スヴァールバル諸島) におけるホッキョククジラの例—」 [F. クルーゼ (F. Kruse)] は、スヴァールバル諸島における 16~17 世紀の捕鯨研究の成果をレビューしている。比較的大きな島とはいえ、北緯 80 度付近のバレンツ海において豊富な文献史料と考古資料を駆使した分厚い研究史が蓄積されていることにあらためて驚かされる。

終章

第 25 章「極北のクラッシュ問題に取り組む」 [K. G. ライトフット (K. G. Lightfoot)] は、人新世 (新人世) において人類が自然に与えてきたインパクト、クラッシュを引き起こす複数の要因、商業狩猟と生業狩猟を区別する必要性や先住民の観点、今後の動物保全やクラッシュの回避にとって必要な知見などが明らかにされた点に、本書の意義を見出している。

II. 本書の意義

北極圏のみならず北半球の高緯度地域は、一般に海洋生産性が高いとされているが、クラッシュはそうした地域であってもさまざまな動物で頻繁に生じている。いうまでもなく、商業的な狩猟・漁業が動物にあたえた影響は計り知れないが、それ以前に生じた動物のクラッシュは人類が引き起こしたものはなく、ほとんどが動物にとっての環境的要因や種の内的要因であったことが本書でも確認されている。そのうえで、クラッシュによって人類がどのような影響を受け、対処してきたのかが、さまざまな資料と視点から明らかにされている点は新鮮である。

考古学的な検討に関しては、まだ荒削りなところがある。また、鳥類と植物のケーススタディーが含まれておらず、同位体分析を用いた検討もないのも残念ではある。とはいえ、本書の内容はこれからの日本・北海道考古学にとって非常に示唆的である。人類と環境の関係を議論するとき、日本では平均気温の変化が重視されるいっぽうで、人類が直接的に働きかける生態系の領域である資源としての動物・植物の水準が軽視される傾向があるからである。また、完新世においては人口の増減を想定する研究が

多いにもかかわらず、日本ではクラッシュへの関心が非常に低い。たとえ資源の増減が想定される場合であっても、自然災害によるカタストロフィーをのぞけば、せいぜい世紀や千年紀オーダーで進行する緩やかな変化が重視される傾向がいまなお強い。しかしながら、たとえば1879年におけるエゾシカのクラッシュは、この種が大雪と寒波に弱く、個体数が1/10以下にもなるカリブーのクラッシュに匹敵するような状況が実際に生じうることを示している。明治初期の出来事が、完新世で初めてのエゾシカのクラッシュであったとは誰も断言できないだろう。だとすれば、遺跡数の減少を平均気温の低下と結びつけるだけの議論の問題点は自ずと見えてくるはずであり、本書はそこで考古学が何をなすべきかについての指針を示しているように思える。

本書における考古学や考古資料の位置づけも示唆的である。北米やヨーロッパでは、考古学は人類の歴史だけでなく、動物の歴史を研究する学問としてすでに機能していることがうかがえるからである。文献史料や現生標本では到達しえない時期の動物の行動を理解するために遺跡出土資料が利用できる、この認識が考古学のみならず文化人類学、生物学、生態学の研究者のあいだで共有されていることが読み取れる。こうした潮流のなかで、今後、北米やヨーロッパでは歴史生態学そのものといってよい研究が考古学のなかから多数生み出されてくることになるかと予測される。このような動向は、過去の生態系を復元するための情報源にもなるという意味で、考古資料（および埋蔵文化財）の学術上の価値をさらに高めることにつながるであろう。しかし、だからといって考古学が人類史の研究と生態系史の研究に二分していくとは考えられず、そうなるべきでもないであろう。考古資料によって解明された動植物の歴史は、結局のところ人類史のよりよい理解のためにフィードバックされ、その成果がさらに動植物のクラッシュや分布変化の要因解明に役立つからである。この好循環は地域に関係なく生み出していくことができるため、高緯度地域にかぎらず出土資料をもちいた歴史生態学やhuman ecodynamics (Fitzhugh *et al.* 2019) に関心のある方にも一読をおすすめしたい。

おわりに

本書には、このほかにも日本考古学で手薄となっている方向性が数多く詰めこまれている。たとえば、先住民の視点、大気と海洋変動のメカニズムをおさえたうえでの環境変動とその人類への影響評価、回遊や採餌など動物の行動もまた長期的に変化することを前提としたダイナミックな考古資料の解釈、疫病を選択肢にくわえた人口クラッシュの説明、系統の解明ではなく過去のクラッシュを探りあてるためのDNA分析の利用などである。高まるアイヌ文化への関心、継続するウイルスとの戦い、スルメイカやシロザケのクラッシュを経験している北太平洋の西端で考古学を実践している研究者にとって、刺激に満ちた一冊であるといえよう。

引用文献

Fitzhugh, B., V. L. Butler, K. M. Bovy, M. A. Etnier 2019. Human ecodynamics: a perspective for the study of long-term change in socioecological systems. *Journal of Archaeological Science* 23: 1077-1094. doi: 10.1016/j.jasrep.2018.03.016

Takase, K. 2020. Long-term marine resource use in Hokkaido, Northern Japan: new insights into sea mammal hunting and fishing. *World Archaeology* 51(3): 408-428. doi:10.1080/00438243.2019.1699854

(Smithsonian Institution Scholarly Press, 2020年発行, 総頁数555頁, ISBN 978-1-944466-34-3)

Book Review

Arctic Crashes: People and Animals in the Changing North

edited by Igor Krupnik and Aron L. Crowell

TAKASE Katsunori

This book is the outcome of a Smithsonian Institution's collaborative research project titled as "Arctic people and animal crashes: human, climate and habitat agency in the Anthropocene" conducted from 2014 to 2016. Twenty-five papers contained in the book address the influence of crash, a sudden and large-scale decline of animal and plant population, to human beings in the Arctic and Subarctic using methodologies of archaeology, cultural anthropology, biology, ecology as well as indigenous perspectives. Through examinations of crash of caribou, sea mammal, and fish, this book reveals actual situations of crash, social change caused by a resource decrease, human impact to various species, and the importance of observations by the indigenous peoples for better understanding of animal resources. This book is also suggestive for Japanese archaeology because they include several viewpoints disregarded in Japan. First, crash should be taken into account in archaeology, whereas relatively stable resource distribution has been presupposed in Japanese archaeology. Second, archaeologists should deal with animal and plant resources in order to approach to the relationship between human beings and natural environment although change in temperature and human population have drawn great attention in Japan. Third, archaeological materials can be studied for restoring not only history of human beings, but history of animals and plants. Finally, the oceanographic processes, a long-term change in animal behavior, phylogenetic analyses to reveal the past bottleneck of animal populations should be also actively introduced in future studies.